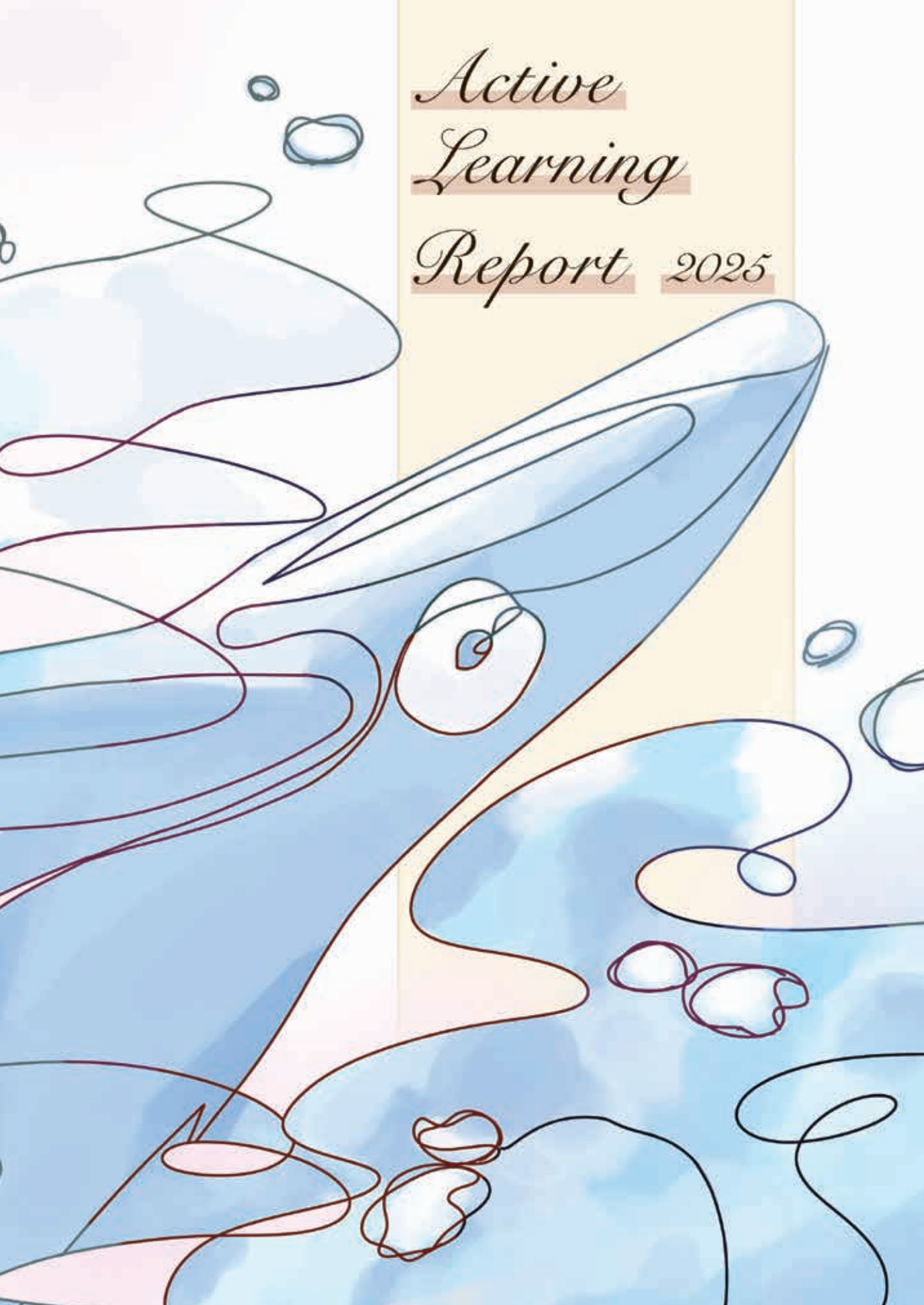
Active Learning Report 2025



巻頭のことば

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科『アクティブ・ラーニング報告書』2025 年度版をお送りします。

昨年度までにひきつづき今年度も、学内そして学外（国内・海外）におけるさまざまなアクティブ・ラーニング型授業・活動を実施することができました。また、いくつかの新たな事業が始まりました。その 1 つは、学生の海外派遣にかんする、独立行政法人国際交流基金との連携です。従来実施しているインドネシア日本語教育実習を、同基金との連携協定にもとづく「日本語パートナーズ派遣プログラム（大学連携インターン）」派遣事業として実施しました。内容の点で従来と大きな変更はないものの、この事業に採択され国の派遣事業となったことで、参加学生の経済的な負担が大幅に軽減されました。

学内、国内で実施する授業・活動においても、新たな試みが始まりました。まず、現代英語学科でおこなわれている英語チャットアワーの、文化交流学科・多言語版の開始です。文化交流学科は毎年、さまざまな国から交換留学生を受け入れています。これまでも交換留学生と正規学生との交流の場を設けてきましたが、交流のさらなる促進をめざし、日本語を学ぶ交換留学生と、交換留学生の母語を学ぶ正規学生が、言語交換やお互いの文化理解をする場を設けました。本報告書に、今年度実施した韓国語チャットアワーの報告を掲載しました。次に、東海村との連携事業です。2025 年 3 月に本学と東海村は連携協定を締結しました。それにもとづき、今年度から本学の授業における実習や実地研修の一部を東海村で実施しており、本報告書に詳しい報告を掲載しました。

従来の継続事業で特に注目したいのは、本学と日立郷土芸能保存会および茨城大学との連携事業「日立風流物」人形制作の技術継承です。「日立風流物」は、国指定重要有形・無形民俗文化財およびユネスコ無形文化遺産です。しかしながら、若い人たちに知ってもらうための普及活動や、後継者の育成が重要な課題となっています。そのため、所属や世代を超え、地域の保存会と近隣大学と連携してこのような事業ができたことは、本学学生にとって有益なだけでなく、今後の本学の地域貢献の点でも非常に意義のあることです。そのほか継続事業として、「文化交流体験」、「多文化協働演習」、「外国人教育支援演習」、「情報デザイン演習」、「学科講演会」、そして、「学科ファカルティ・ディベロップメント（FD）」の報告を掲載しました。

文化交流学科は、茨城キリスト教学園のスクールモットー「ともに生きる」にもとづき、さまざまな言語・文化・宗教・価値観などをもったすべての個人の尊厳と多様性が尊重される社会をめざし、教育をおこなっています。その実践の 1 つとして、教室での学びと教室外での学びを有機的にむすびつけながら、本報告書に掲載したようなアクティブ・ラーニング型授業・活動をおこなうことは、学科の教育の根幹をなすものです。これからも、学科教員全員がアイディアを出しあい、協働して、教育内容を充実させていく所存です。

2026 年 2 月 14 日

文化交流学科主任

中山健一

目次

巻頭のことば（文化交流学科主任　中山 健一）

Ⅰ．文化交流体験Ａ―韓国（釜山、慶州）―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ．インドネシア日本語教育実習（国際交流基金との連携事業）・・・・・・・・・ 7

Ⅲ．多文化協働演習報告（2025 年度後期）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

Ⅳ．３Ｄプリンターによる「日立風流物人形」技術継承の支援事業について

―茨城キリスト教大学・茨城大学・日立郷土芸能保存会 連携事業―・・・・15

Ⅴ．茨城キリスト教大学と東海村の連携協定による学外授業の展開について・・21

Ⅵ．「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」の取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・25

Ⅶ．創作の楽しみ、観る楽しみ―「情報デザイン演習」・・・・・・・・・・・・ 29

Ⅷ．韓国語チャットアワー報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

Ⅸ．学科講演会報告（前期・後期）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

Ⅹ．FD 報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

文化交流体験Ａ―韓国（釜山、慶州）―

鄭敬珍、志賀市子

❖文化交流体験とは？❖

文化交流学科では、世界各国の歴史や文化を体感するとともに、現地の人々との交流を深めることを目的とした様々な授業を展開しています。そのひとつが「文化交流体験」です。この授業は、学生たちが異文化交流を体験する科目として、2007 年度より開講されています。「文化交流体験」は学科カリキュラムの基幹科目に該当し、1 年次生から履修が可能です。受講生は、1 週間程度の現地実習への参加に加え、7 コマ程度分の事前授業、および事後のレポート提出が義務づけられます。事前授業では、学生たちが訪問地域の歴史や文化、言語などを調査して発表します。また、現地では地元の学生たちとの交流会を開催します。このような交流を通して、教科書には記載されていない現地の生の情報に触れることでその国の文化理解を深めるとともに、国を越えた同世代の友達が増える経験をすることができます。文化交流学科の教員は、様々な学問領域の専門家から構成されています。研究対象地域も多様です。そのため「文化交流体験」の実施地域も多岐にわたります。これまでの訪問先は次のとおりです。タイ・カンボジア（2007 年度）、タイ・カンボジア（2008 年度）、ラトビア・ドイツ（2009 年度）、ベトナム・カンボジア（2010 年度）、スリランカ・香港（2011 年度）、カンボジア・ベトナム（2012 年度）、キルギス・ウズベキスタン（2013 年度）、タイ・ミャンマー（2014 年度）、台湾（2014 年度）、フィンランド・トルコ（2015 年度）。中国雲南省デチェン・チベット族自治州（2016 年度：参加希望者が少数であったため授業は中止。学生および教員の有志が自主的に現地を訪問）、フィンランド・エストニア（2017 年度）、沖縄・与論島（2023 年度：参加希望者が少数で中止）、韓国釜山、慶州（2024 年度）。とりわけ、2024 年度はコロナ明けと久しぶりの文化交流体験の実施ということも相まって、20 名以上の学生が参加しました。2025 年度も 前年度に引き続いて、韓国を訪れ、国や言語の違いを越えた異文化交流と文化体験を実践してきました。

（【左】釜山のゆるキャラ・ブギ（カモメ）【右】初日、ホテルのある釜山駅の前で記念撮影）

❖2025 年度文化交流体験 A の概要❖

2025 年度の文化交流体験 A は、韓国の第 2 の都市・釜山（プサン）と新羅時代の都・慶州（ギョンジュ）を訪れ、韓国の歴史や文化を学ぶとともに、現地の大学生や高校生と交流する 6 日間の旅でした。今年度の交流会は、前年度と同様、包括協定校である東義大学校・日本学科に加え、釜山外国語高校の日本語学科と実施しました。

・訪問先：韓国（釜山、慶州）

・日程：2025 年 9 月 7 日～12 日（5 泊 6 日）

・参加者：教員 2 名、学生 12 名（1 年:10 名、2 年：2 名）

❖授業の目的❖

1. 現地の大学生や高校生（東義大学校・釜山外国語高校）との交流

現地の学校での授業参加や交流会を通じて、海外の若者たちとの交流を深めます。

2. 韓国文化の精華に触れる

千年の古都・慶州の世界遺産を訪問し、韓国の歴史や文化を学びます。

3. 異文化学習

事前学習を通して学生自ら訪問国について調べた後、現地を直接訪れ、実体験によって異文化理解を深めます。

❖参加者❖

引率者　志賀市子　鄭敬珍

参加学生　計 12 人（1 年生 10 人、2 年生 2 人）

（慶州にある新羅時代の古墳群・大陵苑と王宮・東宮と月池の前で）

❖集中講義（事前学習、計 3 回）❖

①2025 年 6 月 21 日（土）3 限～4 限

・講義「韓国・韓国文化について知ろう」/グループ決め＆テーマ設定

②2025 年 7 月 19 日（土）3 限～5 限

・学生グループによる発表

グループ①：釜山の歴史と日本との関係　　グループ②：釜山の食文化と産業

グループ③：世界遺産・慶州について

③2025 年 9 月 3 日（水）3 限～4 限

・現地での注意事項および渡韓前の最終確認

❖課題❖

・個人課題（最終レポート、2000 字以上）

テーマ：文化交流体験を通して学んだこと、感じたことなど

❖日程表❖

9月7日（日）	14:00 16:30	釜山空港着 入国審査後、ホテルへ移動（モノレール・地下鉄） アスティ―ホテル釜山（ https://astihotel.co.kr/)
9月8日（月）	9:30 10:50 13:00 17:00	東義大学校に移動（地下鉄・バス） 東義大学校到着 （11:00～図書館ツアー＆12:00～交流会） 【活動①】東義大の学生と出かける 東義大のみなさんと夕食
9月9日（火） 貸切バス	9:30 12:30	【活動②】釜山近現代歴史館→朝鮮通信使歴史館 慶州（国立慶州博物館、文化遺産、夜景など）
9月10日 （水）		自由行動（釜山市内） ～20:00
9月11日 （木） 貸切バス	9：30 15:00 17:00	【活動③】釜山韓服体験館で韓服着付け体験→釜山で一番古い市場・真市場で買い物 釜山外国語高校・日本語学科の学生たちと交流会 広安里海水浴場
9月12日 （金） 貸切バス	8:00 11:00 14:00	ホテル出発 釜山・金海国際空港出発 成田空港第3ターミナル到着→解散

❖現地での様子❖

1 日目（ナコプセ（たこ＋ホルモン＋エビ）鍋を食べ（辛い！）、みんなでアイスを立ち食い）

2 日目（東義大学・日本学科のみなさんとの交流会）

（【左】「イバキリ生の一日」というタイトルの動画には、韓国の大学生も興味津々。【右・下】ゲームやフリートークをしているうちに、みんなすぐ打ち解けました！お昼からは一緒に町に出て、大学生ならではの若者文化を満喫！）

3 日目（釜山近現代歴史館、朝鮮通信使歴史館、慶州）

5 日目（韓服体験、釜山外国語高校・日本語学科の学生たちと交流会）

（【上から】韓服文化館で、韓服の着付けを体験！みんなとてもよく似合っていて、きれいでした。）

（【左】韓国の伝統遊び「ごんぎのり」、【下】みんなで「ジャンボリーミッキー」を踊ろう！）

❖引率教員のことば❖（志賀市子）

今回釜山は私にとって初めての訪問でしたが、第一印象は安全で清潔で、交通の便がよいというものでした。地下鉄や街の雰囲気は日本と驚くほど似ています。けれども看板や広告はハングルばかりで読めない。今回東義大学や釜山外国語高校の日本語学科を初めて訪問しましたが、日本語を学習し、日本に関心を持つ大学生や高校生がこれほど多くいるとは正直なところこれまでまったく知りませんでした。聞けば、釜山は韓国の中でもとりわけ日本語学習熱が高いところなのだそうです。それはやはり、釜山が古くから日本と朝鮮半島の交流の窓口となってきたという歴史あってのことなのでしょう。学生時代に体験した海外での交流は、社会人になってからのツアー旅行とは違い、後の人生の中で大きな意味を持つことがあります（体験者談）。今回参加した学生たちもこの交流での縁を大切にして、これからも釜山やその他の韓国の街を訪れ、韓国語や韓国文化理解を深めていってほしいと思いました。なんといっても、釜山は日本から最も近い外国なのですから。

❖参加学生の声（1）❖

釜山の交通を見ていると、人々の価値観がそのまま表れているように感じた。速さを大事にするのは、時間を無駄にしたくないという意識の表れなのかもしれない。誰かに強制されるわけでもなく、自然とそうなっている。みんなが街のテンポに合わせて生きている。その一体感は、日本の「秩序」や「安全第一」とはまた違う形の調和だと思う。日本では一つひとつの動作を丁寧にこなす文化があるけれど、釜山では「速さ」と「柔軟さ」の中に人間関係が生まれているように感じた。・・・釜山の街を歩きながら感じた「スピードの呼吸」は、今でも頭の中に残っている。交通の違いなんて気にしていなかったはずなのに、気づけばそこに文化の核心があった。これから別の国を訪れるときも、まずはその土地の交通を見てみたい。その街の“速さ”や“間の取り方”を感じることで、言葉では分からない何かが見えてくる気がする。（2 年、峯嶋あいり）

❖参加学生の声（2）❖

韓国で食べたほとんどの料理は量が日本より多い。日本では「残さず食べる」ことが礼儀だが、韓国では集団の食卓を囲み、足りなければ追加し、余れば無理をせず残す。食を通して人と人が「同じものを一緒に食べる」こと自体に意味があり、それを大切にしてきたのだと気づかされた。また韓国語には「식구（シック/食口）」と言う言葉がある。共に食事をする関係を家族と同列に捉える概念であり、今回の旅で同じ班の子とは別に식구も新たにできた。帰国してもなお挨拶をする仲になることができ韓国での旅が友人の幅を広げてくれ、授業で会えることを嬉しく感じる毎日である。・・・私はこの旅を通して、自分が無意識に脳裏で日本的な礼儀や美徳を前提に行動していたことに気づいた。異文化に身を置くことで初めて当たり前が揺らぎ新たな視点が得られるのだと実感した。（1 年、勝山紗帆）

インドネシア日本語教育実習（国際交流基金との連携事業）

中山健一
（文学部「日本語教員」資格「日本語教育実習 A」担当／文化交流学科）

＜概要＞
本稿は、文学部「日本語教員」資格科目（主専攻）の必修科目「日本語教育実習 A」の実習のうちの、本学協定校、インドネシア リアウ大学での実習の報告である。2015 年に本学とリアウ大学が協定を結んで以来、今回が 5 回めである。今回は、独立行政法人国際交流基金が公募する連携協定事業への応募が採択されたため、「日本語パートナーズ派遣プログラム（大学連携インターン）」派遣事業として実習をおこなった。この派遣プログラムは、「日本国内の大学・大学院・短期大学と連携し、日本語教育を専攻する学生を、ASEAN 諸国を中心とするアジアにおける高等教育機関等に派遣する」プログラムである（同基金ウェブサイトより）。参加学生 7 人のうち 5 人が「日本語教育実習 A」単位取得要件の一部と国際交流基金による派遣を兼ねる立場で参加し、「日本語教育実習 A」履修済みの 2 人が純粋に国際交流基金による派遣学生として参加した。

主たる活動は教育実習だが、それ以外にも異文化理解を目的として、リアウ大学学生・本学学生双方による文化交流イベント、かつてリアウ州を治めた王国の宮殿（シアク宮殿）や広大な自然などをめぐる見学を実施した。さらに、本学学生による発信として、大学近隣の高校で日本文化紹介の出前授業をしたり、リアウ大学の YouTube 動画に出演したりした。動画はリアウ大学公式 YouTube チャンネルからみることができる[1]。

現地での活動のうち、教育実習と文化交流イベントについて短く報告する。教壇実習は、リアウ大学の授業担当の先生との打ち合わせ、授業見学、授業補助、教案や教具の作成、担当教員（中山）による個別指導、各自練習をへて、40～50 分間、自分ひとりで授業を実施する形式でおこなった。具体的には、『まるごと 入門』（国際交流基金 編著）の課の一部の導入、口頭練習をした。むろん技術面では拙い点もあったが、学生各々がよく考え、工夫を凝らした授業をすることができた。リアウ大学学生の反応もよく、当初の実習の到達目標はおおむね達成された。文化紹介イベントについて、本学学生が、インドネシア語による茨城キリスト教大学の紹介発表と、日本文化紹介として折り紙とけん玉の実演・体験をおこなった。また、リアウ大学学生が、独立記念日のボートレース大会の紹介、伝統舞踊や歌謡の実演・体験、伝統的な遊びの実演・体験をおこなった。ただ発表を聞くだけでなく、両校の学生が一緒になって楽しめるような、まさに体験型のイベントとなった。

海外の教育現場で実際に日本語を教えること、海外に赴いて異文化を直接知ること、これらが将来日本語教育にかかわろうとする学生にとって、極めて貴重な体験だったことは言うまでもない。しかし何より重要なのは、期間中、本学の学生とリアウ大学の学生が、教える側と教わる側ではなく、同世代の友人として、多くの時間をともに過ごすことができたことだ。この時間は、双方の学生にとって、かけがえのない時間だっただろう。この

[1] https://www.youtube.com/watch?v=e-XOZWcP95E

ような機会を提供してくださったリアウ大学の教職員、学生の皆さんに、心から感謝を申し上げたい。

＜実習先・参加者・日程＞

実習先：リアウ大学教育学部日本語教育学科（インドネシア リアウ州 プカンパル）。

参加者：学生 7 人。2025 年度「日本語教育実習 A」履修者 5 人（文化交流学科 3 年生 2 人、現代英語学科 3 年生 3 人）および 2024 年度「日本語教育実習 A」履修済み学生 2 人（ともに文化交流学科 4 年生）。

引率教員 1 人、中山健一。

日程：2025 年 8 月 31 日 ～ 9 月 10 日。詳細は、下記の表の通り。

8 月 31 日（日）	夜、羽田空港に集合、出国手続き 全日空 NH 871 便　羽田発　＜機内泊＞
9 月 1 日（月）	ジャカルタに到着、入国審査、両替、国内線乗り継ぎ ガルーダ GA176 便　ジャカルタ発⇒プカンバル着 リアウ大学の方と合流、歓迎の食事会、ホテルチェックイン
9 月 2 日（火）	リアウ大学に到着、教育学部正副部長へのあいさつ 教職員・チューター学生との顔合わせ、オリエンテーション キャンパスツアー 文化交流イベントの準備・会場設営
9 月 3 日（水）	文化交流イベントの実施 ・茨城キリスト教大学の紹介、日本文化紹介（本学学生） ・インドネシア文化紹介（リアウ大学学生） 全体ミーティング
9 月 4 日（木）	授業見学・授業補助 教壇実習の準備、教案や教具の作成、本学担当教員の個別指導 リアウ大学 YouTube 動画への出演（録画） 全体ミーティング
9 月 5 日（金）	教壇実習の準備、教案や教具の作成、本学担当教員の個別指導 全体ミーティング
9 月 6 日（土）	リアウ州見学ツアー（シアク宮殿、モスク、オランダ統治時代の建物の見学、船での川下りなど）
9 月 7 日（日）	休息、自由時間
9 月 8 日（月）	教壇実習の実施、教壇実習のふりかえり 近隣の高校（SMA Negeri 9 Pekanbaru）での本学学生による出前授業 教育学部正副部長へのあいさつ 送別会（食事会）
9 月 9 日（火）	ホテルチェックアウト、おみやげ購入 ガルーダ GA175 便　プカンバル発⇒ジャカルタ着 出国手続き、国際線乗り継ぎ 全日空 NH856 便　ジャカルタ発　＜機内泊＞
9 月 10 日（水）	朝、羽田空港に到着、帰国手続き、解散

＜参加学生の感想＞
※レポートから一部抜粋。また、文意を変えない範囲で一部省略、改変。

今回の実習で、日本で生まれ育ったから教えられることが多くあると実感した。（中略）AI による言語学習やオンラインでの学習が可能になってきている現代において、現地で人が授業をする意味を常に考え続けていきたい。

外国で日本語を学んでいる人たちが実際にどのように学んでいるのか、何が日本の日本語教育と違うのかなど、自分の目で見て新たに学ぶことが多くあった。（中略）今回の実習の経験や今後の日本語教育にかかわる経験を、今後どのような進路に進むかを考える材料として生かしたい。

実際に授業をすることで分かる課題や反省点が多くあったので、経験を積んでいきたい。将来は日本の日本語学校等で働きたいと考えているが、今回の経験を通して海外で日本語教員として働くのもおもしろいと感じた。

今回の現地での見学や教壇実習等を通じ、学習者の興味・関心が学習に大きく影響することを実感し、授業の中での学習者の発言などを意識した充実した授業づくりの重要性を学んだ。今後はこのことを国内での実習やその他日本語支援の活動に取り入れながら、今、他の活動で向き合っている学習者にも還元していきたいと思う。それを継続し、将来日本語教育に携わる際にも良い授業ができるように、学びに努めていきたいと思う。

教壇実習では、グループ活動を中心に授業を展開したため、グループ内で日本語ができる学習者と、日本語が苦手な学習者が教えあうという雰囲気が生まれていたのがよかった。また、練習にゲーム性を持たせたので、学習者が飽きることなく練習をおこなうことができたのがよかった。

文化交流イベントを通して、インドネシアという国と日本との文化としての違いを知ることができた。（中略）異国情緒あふれるインドネシア歌謡や伝統的な舞踊などを紹介してもらい、またよくわからないながらもステージに上がり、舞踊に参加することで、外国から外国人が来たからおもてなしをするという、ゲストとホストの境界など気にしないインドネシアという国の良い意味での奔放さを感じた。このように異文化の人どうしが、分け隔てなく一緒に何かをすることは、貴重な体験だった。

渡航前に文化交流イベントの準備をするとき、自分の大学に留学に来ているリアウ大学の学生からインドネシアの伝統的な四行詩を教えてもらった。これは、イベントやフォーマルな場でよく使われるようだ。これを発表の前にインドネシア語で述べたことで、会場内が尋常でない規模で盛りあがった。このことから、こちらも相手の国の文化を学び、実践することが円滑なコミュニケーションの一助になることを実感した。

＜写真＞

文化交流イベント（折り紙体験）

教壇実習

授業補助（ディスカッション）

リアウ大学 YouTube 動画の収録風景

リアウ州見学（シアク宮殿）

多文化協働演習報告（2025 年度後期）

担当：染谷智幸・鈴木晋介

本年度の授業の趣旨・目標は以下のように定めて、授業を行った。

◆授業の趣旨

授業のテーマ「”異国”としてのふるさと–巴水・風景・文化・食を通して考える-」

◇ 授業の三つの目標

❶参加した学生・留学生が、「原風景」としての〈ふるさと〉を「異国」（異国に居る、異国と比較する）に視点を置きつつ、〈ふるさと〉を描いた文化・芸術を再認識し、人間にとって〈ふるさと〉とは何かを考えることを目的とする。

❷同時に、その〈ふるさと〉への探究とそこから得た知見が、地域の活性化や振興にどう生かせるのかを考える。

❸〈ふるさと〉の考察の過程で浮かび上がってきたものを、口頭発表と、そのパネル化という手法を通して、広くアウトプットすることを、三つめの目標とする。この二つの発表を通して、他者にどう伝えれば効果的か、また共感を得られるかを学ぶ。

なお、最終的なパネル化は、大学という枠を超えて、外部の美術展の一部を借りて展示をすることを予定した。その結果、水戸市の常陽藝文センター（藝文プラザ）で、2026 年 2 月 18 日から 3 月 21 日まで行うことになった。

▼展示に先立って行われた教員（染谷）によるギャラリートークの風景

▼展示の前日（2 月 17 日）に行われた、学生たちによる準備の一コマ

以下に学生の作品、感想・批評、担当教員からの報告を記載する。

◆展示した学生の作品

なお、学生作成のポスターをすべて掲出することはできないので、K・S さん作成の全体像❶と全 6 作品中 3 点のみを掲示する。1 点は、川瀬巴水の朝鮮八景をもとにした日韓比較❷。2 点目は、インドネシアに伝わるワヤンクリという影絵で、大子・袋田に伝わる天狗伝説を再現❸。3 点目は、日本とベトナムの関係を考えながら「ふるさと」を原理的に考察したものである❹。

❶

❷

❸ →❹

この写真はパネルの一部を大きくし見やすくしたものである。

パネルは袋田の天狗伝説をインドネシアに伝わるワヤンクリという影絵の手法を使って再現したものである。故郷と伝説というと古くさいイメージがあるが、それを他の国や民族の文化と結びつけ、積極的に現代に蘇らせるという発想はとても新鮮。まさに多文化協働の世界である。

◆学生の感想・批評

印象的なものを２点掲示する

今回、川瀬巴水の「桃浦」と「朝鮮八景」という作品について発表やパネル製作をすることを通して、「ふるさと」とはただ生まれた場所であるだけでなく、自分たちが自然と懐かしさや安心感を覚える場所であると感じた。また、韓国で描かれた作品からは、自分のふるさととは異なる、異様な雰囲気を感じたことから、他人から見た自分のふるさとは異世界的なもののように見えるのかもしれないと考えた。今回のパネルでは、ふるさとの風景を主にまとめたが、風景だけでなく、建物や方言、料理などからもふるさとを感じ取れるものが多くあるため、これらの中から方言を組み合わせた作品を作ることで、より多くの人にふるさとである茨城らしさが伝わるのではないかと考えた。(中略)

自分たち以外のグループでは茨城のふるさとらしさを神社や食べ物で表していたり、それぞれの留学生の国のふるさとを有名な観光地や伝統的な食べ物などで紹介していたりするのを聞いて、茨城や韓国以外にも勿論ふるさとはあるし、それぞれの国の気候や生活様式によって異なることが分かった。これらのことから、今回はそれぞれのグループが全く異なるものでふるさとを紹介していたが、次機会があれば、同じものを各国で比較しながらふるさととは何か知ることができたら面白いと感じた。

今回の多文化協働演習のパネル製作などを通して、今まで考えたことのなかった「ふるさと」

について詳しく調べたり深く考えたりすることができ、また、周りの人と話し合いながら作業を行うことができたことは、とても貴重な体験であると感じた。次は茨城という大きい括りではなく、自分の生まれ育った市にはどんなふるさとらしさがあるのか考えたり調べたりしたいと思った。(1 年、S. S)

イタリアの「ふるさと」を考える上で重要なのが、地域の特産物である。今回、茨城県大子町の名産であるりんごと関連づけて、イタリアのりんごについて調べた。イタリアはヨーロッパで有数のりんご生産国であり、特に北部の山岳地域で多く栽培されている。その代表例が、アルプス山脈に位置するヴァルテッリーナ地方である。 Ｖａｌｔｅｌｌｉｎａ ヴァルテッリーナのりんごは、気候や標高、昼夜の寒暖差といった自然条件と、人々の丁寧な手作業によって育てられている。認証を受けたこれらのりんごは、地域の歴史や暮らしと深く結びついており、単なる農産物ではなく、その土地の〈ふるさと〉を象徴する存在だと言える。ヴァルテッリーナ IGP のりんごには、ゴールデン・デリシャス、レッド・デリシャス、ガラの 3 種類があります。ゴールデン・デリシャスは黄金色の皮で甘みが強く、シャキシャキとジューシーな果肉が特徴です。レッド・デリシャスは鮮やかな赤色で香りが豊か、果肉は柔らかくジューシーです。ガラは赤い地にピンクの縞模様が入り、酸味が少なくやさしい味わいで、生食に最適です。これらのりんごは、気候や土地の影響でそれぞれ独自の風味を持ち、地域の食文化に深く根ざしています。 このように、イタリアにおける〈ふるさと〉は、食文化や地域の自然、そして人々の営みが重なり合って形作られている。流行に頼るのではなく、土地に根ざした文化を見つめ直すことが、 持続的な地域の活性化につながるのではないだろうか。 （留学生、N.T）

◆担当教員からの報告

実際に開かれる美術展で学生の調査・作品を掲示することに、当初心配もあったが、学生たちの意欲・努力で優れた作品に仕上がったと思う。なお、常陽藝文のギャラリーや常陽プラザに訪問し、藝文の担当者と調整する中で、ギャラリーやプラザにおいて、県下の大学生や高校生が積極的に作品（油絵や歴史の考察）を展示していることを知った。本学・本学科も積極的にこうした展示を使いながら、学生たちの才能を伸ばす機会を設けるべきだと感じた。 （染谷智幸）

正規学生と留学生が互いのふるさとの差異と類似性を模索しひとつの作品に仕上げていく協働（コラボレーション）は、スリリングで創発性に満ちたものであった。「りんご」、「水辺」、「伝承」といった具体をとっかかりに、あれこれとアイデアを出し合うグループワークは笑い声にあふれ、傍で見ている教員にも楽しく、頼もしかった。学生たちは高いポテンシャルを秘めている。それを如何に引き出すか。わたしたち教員の創意工夫にかかっているはずである。

（鈴木晋介）

3D プリンターによる「日立風流物人形」技術継承の支援事業について

－ 茨城キリスト教大学 ・ 茨城大学 ・ 日立郷土芸能保存会 連携事業 －

＜ 文化論演習Ⅱd／Ⅳd ・ 地域貢献研究 ＞

清水 博之 ・ 柴田 傑

はじめに

本稿は、ユネスコ無形文化遺産に登録された日立風流物に用いられる糸操り人形の技術継承に対する支援事業について述べたものである。これまでに令和 7（2024）年度『アクティブ・ラーニング報告書』の「『地域貢献研究』授業報告（pp.18-20）」の中でも活動の一部を紹介しているが、本稿では日立風流物の文化財・文化遺産としての位置づけとこの支援事業の経緯などを解説して、実際に 3D プリンターで作成した小型人形の制作を体験した学生のレポートを掲載して報告する。併せて、協働してこの連携事業を推進している茨城大学大学院理工学研究科応用理工学野情報科学領域講師 柴田傑氏にもご寄稿をいただいた。

文化的資産としての日立風流物

日立風流物は、日立市神峰（かみね）町に鎮座する神峰神社の例大祭のときに、氏子たちが奉納披露する山鉾である。昭和 34（1959）年に国の重要民俗資料（昭和 50（1975）年の文化財保護法の改正により翌年から「重要有形民俗文化財」に名称変更）に指定された。そして、昭和 52（1977）年には、国の重要無形民俗文化財に指定された。どちらも、山・鉾・屋台行事の類いでは全国で最初の指定である。

平成 18（2006）年に発効したユネスコの無形文化遺産保護条約における「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」への記載にあたっても、平成 21（2009）年に「京都祇園祭の山鉾行事」とともに単独登録された。平成 28（2016）年には拡張提案により「山・鉾・屋台行事」を構成する文化遺産の一つとしてあらためて登録された経緯がある。

日立風流物の民俗学的な価値は、古来の信仰対象としての磐座（いわくら）を模した岩山を後ろに置いていることに併せて、その前面（表館：おもてやかた）には巧妙な仕掛けが仕組まれており、当初は城郭の姿をしていながら披露するときには5段の舞台が現れ、糸操りの人形芝居が演じられるところである。この人形芝居が終わると素早く回転して岩山（裏山：うしろやま）側でも、別な人形芝居が演じられることも大きな魅力になっている。

日立風流物の沿革

日立風流物（もとは旧宮田村の風流物であることから宮田風流物と言われていた）は、元禄8（1695）年に水戸藩第二代藩主を退き西山荘で隠居生活をしていた徳川光圀が神峰山へ登山参拝の折に社寺改革の一つとして、それまで宮田村の鎮守であった神峰神社を、隣村である介川（助川）村と会瀬村を含めた地域の鎮守とすることを命じたことに始まると伝えられている。

それまでの渡御は、神峰山頂の本殿（元禄元（1688）年に中腹の鬼ヶ洗水から遷座された）から遥拝殿を経て御旅所である「浜の宮（潮垢離の地）」まで、神霊の依代である鉾を担って往復するだけであったものが、介川と会瀬の村々を経由することになった。それまで、この渡御に伴って曳かれていた風流物の前身ともいうべき飾り山は、この長い経路を曳き回すことが叶わずに渡御が戻って来るまでの間、遥拝殿近くの立場（披露公開の場）で、村人たちを楽しませる役割を担うことになったと思われる。このことによってこの飾り山の芸能が工夫され、さらにはさまざまな技巧が時代とともに加えられることによって発展していったのであろう。特に人形の糸操りについては、享保期（1716～1736）の大飢饉（1732）に際して、旅芸人たちが村留めにあったときに宮田村に逗留した人たちが、世話になった礼にと村人へ人形の作り方や操り方を教えてくれたと伝えられている。これが風流物に取り入れられて、村人たちがそれぞれの家でその技術を継承することになったという。

支援事業の経緯

この事業は、茨城大学大学院理工学研究科及び同大学社会連携課から本学への連携の呼び掛けから始まった。令和 5（2023）年 2 月 21 日（火）に茨城大学工学部において話し合いがもたれ、連携事業に関する基本的な合意をした。この過程で、本学では Feasibility Study（実現可能性調査）（案）を作成して 5 月 18 日（木）に学内で協議した結果、「『日立風流物』人形のデジタル化（仮称）」事業を茨城大学および日立郷土芸能保存会と連携して推進する方針を決定した。その後の連携（協働）事業の日程と内容の概要は、下記のとおりである。

記

〔令和 5（2023）年〕

8 月 24 日（木）	本学の担当・清水が茨城大学の担当者となる大学院理工学研究科応用理工学野情報科学領域講師 柴田傑先生の研究室を訪ねて、3D プリンターによる制作過程を実見し、その作業工程の解説を受けた。
11 月 14 日（火）	本学の研究室において、日立郷土芸能保存会会長の水庭久勝氏と茨城大学の柴田先生と院生、学生が今後の進め方について協議した。

〔令和 6（2024）年〕

5 月 30 日（木）	茨城大学工学部の柴田研究室において、3D プリンターによる人形の（かしら）の制作進捗状況を確認した。
7 月 11 日（木）	水庭会長宅において、茨城大学の柴田先生他学生2名とと制作した試作品を持ち込み、指導と助言を得た。
11 月 12 日（火）	本学の「地域貢献研究」の授業で、水庭会長と茨城大学の柴田先生、院生、学生が支援事業についての講話と研究報告をした。

〔令和 7（2025）年〕

6 月 13 日（金）	本学の清水研究室へ茨城大学の柴田先生他院生2名が来訪した。今後の事業について打ち合わせをした。
7 月 23 日（水）	水庭会長宅で、茨城大学の柴田先生他院生2名とともに制作した人形の試作品をご覧いただき、助言を得た。具体的には、人形の操作時に動かないようにするための台が必要であること、人形の首は上下に動くが、

人形の操作は観覧者よりも高い所で演じられるので、できるだけ下向きになるように胴柄へ取り付けることが大事であるとの指摘を受けた。

9月13日（土）　水庭会長宅で、茨城大学の柴田先生他院生2名とともに、再度の人形試作品の持ち込みをして、さらに貴重な助言を得ることができた。

9月27日（土）　本学の11号館11304教室において日立風流物人形制作講座を開催した。日立郷土芸能保存会からは本町支部の5名と水庭会長が参加して指導にあたった。茨城大学からは柴田先生と院生2名がそれぞれの研究分野について発表し、3Dプリンターで制作した小型糸操り人形の組み立て作業と遠隔による人形操作を本学学生6名が体験した。

〔学生レポート〕

文化論演習Ⅱd　　実施日：令和7（2025）年9月27日

日立風流物小型人形制作講座「本物の糸操り人形の操作と小型人形の制作を体験して」

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 3年　鎌田 結

1．本物の日立風流物人形の操作体験

今回の体験会では、はじめに日立風流物で使用される本物の人形の操作を体験させていただいた。お囃子の音を聞きながら日立郷土芸能保存会の作者の方が操作する様子を見学したが、実際に体験すると見学時の動かし方のイメージとは異なり、紐を引く際の重さ（抵抗）が強く伝わってきた。左右の腕につながる紐を交互に引くように、基本とされる操作手順自体は単純であっても、力の込め方で動きが変化したり、自分が思うよりもう一段階強く引かなければ腕が完全に動かなかったり、実際に触れて初めて難しさを実感することが多かった。

操作の様子を見ているだけでは必要な力の大きさや、力加減と人形の動き方の関係などを理解することは難しい。ただ真下に紐を引くだけでなく繊細な力加減を意識した操作・集中力が求められる。そのような難しい操作を山車の内部の限られた行動範囲で行っていることに驚いた。早返りにおいては、速度を遅く半回転させるだけでも緊張したが、本番の速さを見せていただいた際、一瞬で人形の顔が素早く変わる速さで回転することを実感した。日立風流物の見せ場としてのこだわりがあり、経験や力を要する職人技だと感じた。

クライマックスである早返りを一斉にする魅せ方や、観客に操作者の姿を見せないようにするため、舞台の前に草を模した板を設置するなどという配慮から、演技へのこだわりや誇りが読み取れた。

2．日立風流物の小型人形の制作体験

小型人形制作体験では、茨城大学大学院の方が 3D プリンターで作成してくださった部品を用いて小型人形の組み立てを行った。組み立て作業を通して各部品をしっかり見ることで、本物の人形の骨組みにおいて最も基本的な構造を知ることができた。また、組み立て方法がわかりやすく、プラモデルを組み立てるようで幅広い層にとって親しみやすいと感じた。さらに、各部品の素材もプラスチックであるため、本物であれば壊してしまうことへの緊張感から思うように触れられないといった懸念も減ると考えられた。そのため、日立風流物や関連した展示を実際に見に行くといった伝統芸能への関わり方とは別の方法で、日立風流物に対する関心を高める手段になりうると感じた。

3. 日立風流物の人形遠隔システムの操作体験

小型人形制作体験後に、インターネットを用いて小型人形を動かす遠隔システムの体験をさせていただいた。現代的な技術と日立風流物という伝統芸能・伝統的な技術が掛け合わせられており、遠くで操作しても人形に自分の力加減が反映されるため、山車の高さを感じながらの操作体験のように、体験内容の幅が広がると感じた。インターネットが身近にある層にとってはレプリカを用いて自ら人形を動かす体験により、手動で動かす本物の動きへの関心が高まり、若い世代に対しても日立風流物に触れる機会の創出にもつながると考えられた。

4. まとめ

通常の公開時には演技において人の姿は見えない。しかし、今回の操作体験を通して作者の方々が操作を行う様子を見学し、本物の人形に触れることができたため、とても貴重な体験をさせていただいた。 そして、小型人形制作体験では、人形の観察だけでは大まかな理解のみとなる可能性がある人形の基本的な構造について組み立て作業から学ぶことができた。楽しみながら伝統芸能に触れるという点において、伝統技術への関わり方として新しい体験だった。これらの体験を通して、実際の公開時に本物が動く場面を見てみたいと感じ、日立風流物への関心が高まった。この事業は、伝統芸能に関心を持ってこなかった人たちに対して興味を惹いてもらえるようになるための新たな手法である。従来の考え方では、伝統芸能とは相容れないと思われてきた最先端の工業技術がコラボレーションすることにより、新たな継承の未来が展望できる可能性を秘めている。継承者の人たちにとっても技術的、心情的にも大きな意味を持つ支援事業といえる。

写真① 本物の日立風流物人形操作体験

写真② 日立風流物小型人形制作体験
（人形の部材は3D プリンターで製造）

写真③ 遠隔操作による日立風流物小型人形の操作体験（Wi−Fi 接続）

写真④ 体験会終了後の記念写真
（茨城大学・日立郷土芸能保存会・茨城キリスト教大学）

（茨城キリスト教大学 教員　清水 博之）

〔寄稿〕

工学技術を活用した日立風流物の伝承支援

茨城大学工学部柴田研究室では、工学技術を活用した日立風流物の伝承支援技術の開発について取り組んでいる。この取り組みでは、従来は風流物作者によって木工加工によって作成していた風流物の人形のレプリカを3次元計測し、写真 1 に示すように3Dプリンタによって復元している。

また、実物の入手が困難になりつつあるカシラ（首）の3D復元にも挑戦している。写真 2 に示すように復元したレプリカは従来のレプリカと同様の構造をしており、パーツの組み立ておよび紐を引く操作を簡易的に体験することができる。カシラは文楽のカシラをスキャンし、写真 3 に示すように風流物の人形に合わせて首の角度や可動部分を作成し、風流物の胴のレプリカに接続している。

写真１　従来のレプリカと 3D プリンタによる復元

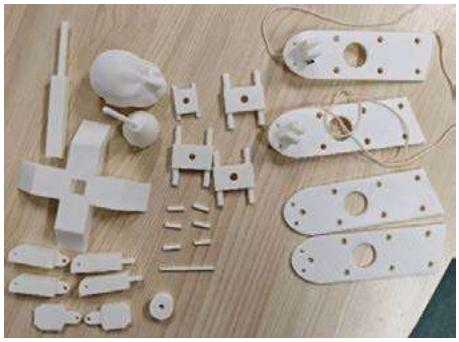


写真２　復元したレプリカのパーツ

写真３　スキャンして加工したカシラ

さらに、単なる復元だけでなく、山車のレプリカや博物館のケースに展示されることを想定し、写真 4 に示すように可動部にモータを組み込んだレプリカを製作し、写真 5 に示す人形から離れた場所から紐を用いて遠隔で操作するデバイスのプロトタイプも開発した。

今回、茨城キリスト教大学内で風流物の保存会の方をお招きして開催した日立風流物の体験会において、開発したレプリカのプロトタイプを参加者に体験してもらった。体験会では、風流物の基礎的な背景を動画で学習し、保存会の方による本物の人形の実演および操作体験、その後レプリカの組み立てを体験した。写真 6 に組み立て体験の様子を示す。

実物に比べると簡易的ではあるものの、参加者が自らの手でレプリカを組み立てることによって、外からの観察だけではわからない仕組みを体験できた。また、実物の風流物の人形と比較することによって、実物の人形がいかに精巧な工夫を重ねてきた人形であるのかを体験してもらうことができたと考える。また、レプリカとしての動きが再現できているとのご意見の他、さらに実物に近づけるための工夫点についてのコメントなど、前向きなご意見をいただいた。

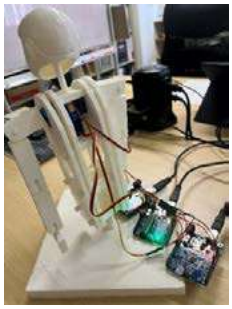


写真４　モータを組み込んだレプリカ

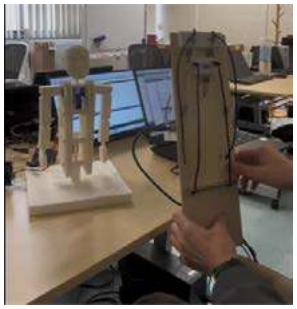


写真５　遠隔操作デバイス

写真６　組立体験の様子

表１　工学技術を活用した伝承支援技術に関するアンケート（1）

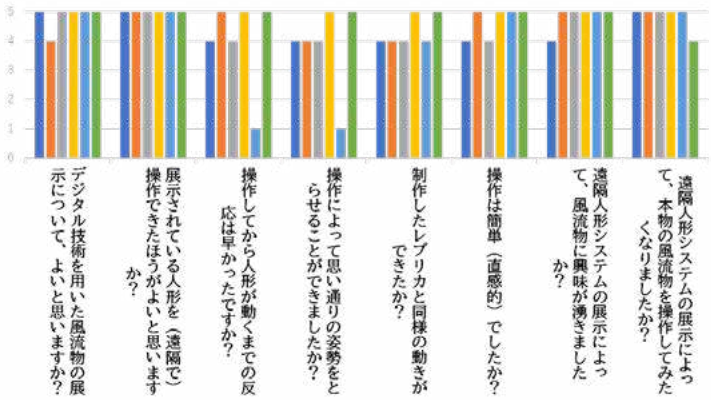


表２　工学技術を活用した伝承支援技術に関するアンケート（2）

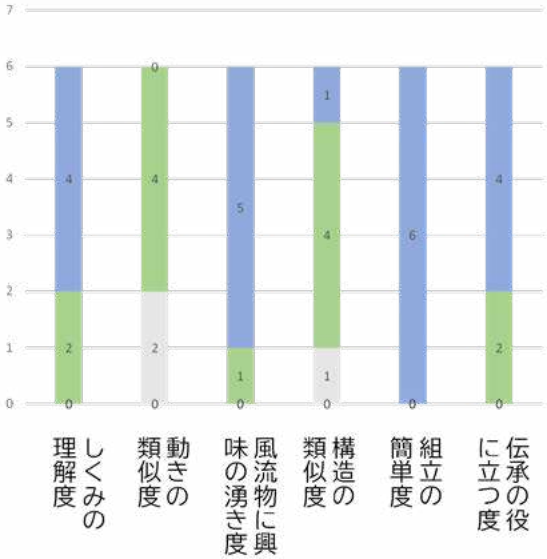


表１、表２に示す工学技術を活用した伝承支援技術に関するアンケートにおいても、風流物の構造について理解を促すことができたと同時に、従来とは違った新しい形での伝承支援について、一定の期待が持てることが明らかになった。

日立風流物は、歴史のある民俗芸能であり、組み立てや演技の技術が伝承されてきている。その一方で、常に新しい「工夫」が施されており、人形の作者の技術の伝承が重要と考えられる。これまで継承されてきた技術を守りつつ、工学的な技術によって伝承を支援できる可能性を示すことができた。本イベントによって、工学部の技術と文化的な理解を総合的に学習できる場を設けることができたと考えらえる。今後も、相互に連携しながら文化の伝承に寄与していきたい。

（茨城大学大学院 教員　柴田 傑 ）

茨城キリスト教大学と東海村の連携協定による学外授業の展開について

＜「博物館実習」・「文化論演習Ⅰd／Ⅲd・Ⅱd／Ⅳd」・「未来教養基礎演習Ⅲ・Ⅳ」＞

清水 博之

本学と東海村は、令和7（2025）年 3 月 28 日（金）に、「東海村と茨城キリスト教大学との相互連携・協力に関する包括協定書」を取り交わした。

この協定書では、第１条（目的）に、「本協定は、両者が、地域の課題に対して、学術研究の成果を活かした効果的な施策展開を図るとともに、未来を担う人材の育成を行うことで、魅力ある地域社会を構築し、両者の発展及び地域社会への貢献に資することを目的とする。」とある。

写真① 協定書締結の記念写真

この目的を受けて、本学においては、「博物館実習」「未来教養基礎演習」「文化論演習」の各授業の一部を現地で実施することにより、実践的な連携活動として位置付けることにした。

前期では、演習に関する2つの授業において、東海村歴史と未来の交流館を拠点とし、村職員の村づくりにかける想いと実践してきた業務（シティプロモーションなど）をプレゼンテーション形式で紹介していただいた。そして、交流館に常設されている展示を観覧しながら学芸員の解説を聴き、古代から現代にいたるまでの村の沿革を概観することができた。次に、古地図と現代の地図を見較べて、その相違から村の発展と変容を知ることができた。総仕上げとして、交流館から東海駅までの経路を歩いて巡り、途中の自然や建造物、道路、大型商業施設、マンションなどを観望しつつ解説を聴くことにより、実際の街中の様子を実感できた。その途中では、駅前の大型商業施設で催されていた「村長とのふれあいトーク」へも飛び入り参加して、躍動的な村の現状を体感することができた。

後期には、博物館実習の実務実習を東海村歴史と未来の交流館で実施した。それぞれの分野の学芸員による専門性を生かした実践的な実技実習や収蔵庫などのバックヤードを含む施設の見学をとおして、大学内の授業では体験できない本物の資料を使ったまさにアクティブ・ラーニングそのものの授業になったことはとても有意義なことであった。

次には、未来教養基礎演習と文化論演習で東海村の昔の姿と現在の姿を現地で学修するために、村松地区に焦点を絞り、現地演習（巡検）を実施した。村松虚空蔵堂の威容とその前面に伸びる古来の参道、そして、虚空蔵堂の奥に位置する大神宮を巡った。特に旧・晴嵐荘病院から移されたという晴嵐神社では、戦前に日本初の国立結核療養所を受け入れた村松地区の人たちの苦悩と決心を知ることができた。その反面では、この施設が設置されたことにより、地域の人たちの働く場や農産品の購買先として大きな恩恵があったことも知り得た。そして、戦後の村松地区は、やはり日本初となる「原子の火」が灯った場所でもあった。その困難な決断にいたるときに、晴嵐荘を受け入れた成功事例が、村民の意識の基底にいささかなりとも何らかの役割を果たしたのではないかと考えさせられる授業であった。砂丘の中にある八間道路では、広大な砂丘によって苦しめられてきた歴史を垣間見ることができた。しかし、現在では鬱蒼と茂る松林に覆われている。この地の人たちが植林によって築き上げたこの風景は、現代を生きる私たちにとって大きな教訓であった。

東海村における学外授業の概要
〔令和7（2025）年度〕

・　6月7日（土）　〔未来教養基礎演習Ⅲ〕 現地演習「東海村の今昔」
演習場所：東海村歴史と未来の交流館
演習内容：村職員による講話と話し合い、展示の観覧と学芸員の解説による東海村の沿革の概観、交流館から東海駅までの現地巡検

・　6月21日（土）　〔文化論演習Ⅰd／Ⅲd〕 現地演習「ひとづくりからシティプロモーションへ」
演習場所：東海村歴史と未来の交流館
演習内容：村職員による講話と話し合い、展示の観覧と学芸員の解説による東海村の沿革の概観、交流館から東海駅までの現地巡検

・　10月4日（土）　〔博物館実習〕 実務実習「歴史・自然・考古・展示の実務」
演習場所：東海村歴史と未来の交流館
演習内容：交流館の沿革、常設展示から見る「開かれたムラ」の歴史と人たち、民俗資料の分類（実習）、自然資料のラベル添付と記録（実習）、バックヤード（収蔵庫、荷解き場、燻蒸室など）の見学、古文書の保存方法（実習）、考古資料の取り扱い方と展示固定の方法（実習）

・　12月13日（土）　〔未来教養基礎演習Ⅳ〕 現地演習「東海村村松の歴史と現代」
演習場所：東海村村松地区一円
演習内容：「東海村歴史と未来の交流館」学芸員による現地巡検
おもな見学先：虚空蔵堂、大神宮、晴嵐神社、八間道路、真崎浦干拓地、原子力科学館（別館のJCO臨界事故展示を含む）など

・　1月10日（土）　〔文化論演習Ⅱd／Ⅳd〕 現地演習「虚空蔵尊と大神宮そして原子力へ」
演習場所：東海村村松地区一円
演習内容：「東海村歴史と未来の交流館」学芸員による現地巡検
おもな見学先：虚空蔵堂、大神宮、晴嵐神社、八間道路、真崎浦干拓地、原子力科学館（別館のJCO臨界事故展示を含む）など

写真② 土器を展示台にテグスで固定する実習（10/4）　写真③ 展示室で「開かれたムラ」の歴史を学修（10/4）

〔学生レポート〕

文化論演習Ⅱd　　実施日：令和８（2026）年１月 10 日

現地演習「虚空蔵尊と大神宮、そして原子力へ」

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 3年　塙 駿希

まず一つ目の目的地である東海村の村松の虚空蔵尊へと向かった。日本三大虚空蔵尊の一つとされており村松は特に知恵や知識、記憶力の向上にご利益があるとのことだった。昔は中国に渡って教えやお経を頭に叩き込んでそれを日本に持ち帰り伝えていたはずであり、無尽蔵の知恵を象徴する仏として受験や資格試験、芸事の上達を願う人々が多く参拝に訪れている。仁王門を抜けると丑と寅の守り本尊がありその奥に大きな本堂が佇んでいた。毎年訪れてはいたが、あらためてその存在感に驚いた。学芸員の林さんのお話によると、村松虚空蔵堂は寺院が一般的に持つ墓地を持っておらず経済的基盤として加持祈禱などが収入源となっているという。村松の虚空蔵尊は古くから十三参りの場として広く知られている。十三参りとは数え年で 13 歳になった子供たちが参拝して、厄除けなどを祈願する行事である。十三歳は干支が一回りする節目の年であり、人生において最初の厄年とされる。また、虚空蔵菩薩は十三仏の 13 番目にあたる菩薩であることから、13 という数字に深いつながりがあることがわかった。

次に村松大神宮である。村松大神宮にはかつて執り行われていたという俗にヤンサマチと呼ばれる祭りがある。神輿を海へ運び潮水に浸すことで穢れを祓って身を清める浜降り神事と村松大神宮から酒列磯崎神社までの約 10 キロメートルの海岸で競馬をする神事が統合されたものである。現在は祭典だけ執り行われている。かつては祭礼の日に各村の神輿を担いで行列をつくって神事を行っていた。多くの人が浜に降り立って集まり、海岸一帯が人で埋め尽くされる壮大な祭りだったという。長い棒を持った人々が互いに棒を叩き合ったりして、その日は喧嘩が許されるルールが存在したという。平磯の平らな石から光が真っ直ぐこの大神宮の方角に射したという伝説も残っている。

村松大神宮の境内にある晴嵐神社は、日本初の国立結核療養所である晴嵐荘病院の敷地内に病気平癒や治療成就、医学の発展を祈願して建てられた神社である。結核はかつて不治の病として恐れられており、清涼な空気のところで静養して快復を神に頼るしかない病気だった。終戦後の政教分離政策により、国立の施設内に神社の存在を認めることが出来ないという理由で宮を移すこととなった。現在でも病気に悩む方々の心の拠り所として参拝されているという。その後に訪れた八間道路では、砂丘の柔らかい砂地を生かして野球の少年団や陸上部などが駆け足などの練習をしていた。砂丘の周辺にはやはりクロマツが多く見られた。門前町である村松には今でも旅館が多くある。以前であれば参拝者が泊まったのであろうが、現在ではさまざまなところからスポーツのトレーニング合宿のためにやって来るという。国道 245 号の駐車場から眺めた真崎浦の干拓地は、以前にはコイやフナなどが生息する湖沼だったが、大雨が降る度に水が溢れて人々を苦しめていたため沼を埋め立てて水田に変えたという。

そして、最後に原子力科学館へと向かった。前に一度行ったことはあったがその時からリニューアルされてまるで別の施設のように思えた。施設の中はどれも楽しく放射線や原子力について学べるように工夫がなされていて非常にワクワクした。放射線が飛んだ跡を霧箱の中で見ることができアルファ線・ベータ線・ガンマ線の違いをはっきりと確認することができた。それから身の回りにあるものの放射線の強さや影響だったり放射線の技術がどのように使われていたりするのかなど他にもいろい

ろと体験することができた。そして別館では、平成 11（1999）年に東海村の原子力発電所で起きた正規ではない手順によって大量のウラン溶液を沈殿槽に投入したことによる臨界事故の詳細が展示されていた。ここでは、このようなことが二度と起こらないようにこの事故の経験を次世代へ受け継ぐという強い決意を感じた。他にも原子力事故が起きた場合の非常時の備え方や発電所の安全対策、環境放射線常時監視テレメータシステムなどの展示があった。

このたびの東海村の巡検では、地域に根付く信仰や歴史、そして現代社会を支える科学技術までを一連の流れとして学ぶことができた。村松の虚空蔵尊では知恵や記憶力の向上を願う人々の信仰が長い年月にわたって受け継がれてきたことを実感し、十三参りなどの行事を通して人々の人生の節目と深く結びついていることを理解した。また寺院の成り立ちや経済状況にも触れることで地域社会の中で果たしてきた役割について考える機会となった。村松大神宮ではかつて盛大に行われていたヤンサマチの祭りを知り、人々の価値観や結束の強さを感じた。さらに晴嵐神社の存在から医学が発展する以前に人々が病と向き合う中で宗教に救いを求めていた歴史を知り、信仰が人々の心の支えであったことを改めて認識した。周辺の砂丘やクロマツ、真崎浦の変遷からは人が自然環境と向き合いながら生活を築いてきた過程も学ぶことができた。原子力科学館では、放射線や原子力について体験的に学ぶことができ、身近な存在としての放射線やその利用について理解を深めることができた。特に東海村臨界事故の展示からは科学技術の利便性の裏にある危険性や安全管理の重要性、そして同じ過ちを繰り返さないために記録し伝え続けることの大切さを強く感じた。

写真④ 交流館の空中写真で巡検前の学修（6/21）

写真⑤ 駅前の近代化を現地巡検で確認（6/21）

写真⑥ 大神宮の境内に移された晴嵐神社（1/10）

写真⑦ かつては水が満ちていた真崎浦干拓地（1/10）

「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」での取り組み

入山 美保・岩間 信之

1. はじめに

本学文化交流学科が開講する「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」の授業は、1）大学教員による大学生への日本語支援の指導、2）大学生による外国人への日本語支援、の二つで構成されている。1）では、日本語教育および地理学（地域課題の調査）を専門とする教員が担当し、日本語支援に取り組む大学生を指導する。2）では、正規学生と留学生がチームを組み、日本語レベル初級～上級の外国人児童・生徒およびその保護者に対して、実際に日本語学習支援や各教科の学習支援を行う。履修生は、日本語教育や教職を学ぶ大学生および日本語能力試験 N2 程度の交換留学生である。

本学は、2021 年より「IC with U プロジェクト」を進めている。プロジェクトは、①学習支援（外国にルーツのある子どもたちへの日本語学習や教科学習支援）②地域への理解・浸透（異文化理解への素地づくり）③人材育成（多文化協働クリエイターの育成）で構成される。「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」は上記①に該当するほか、③の講座認定科目にもなっている。

2.「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」での取り組み

今年度は、新しい試みとして、外国にルーツを持つ子どもの母親二人への日本語支援を行った。前期は、子どもが日本語を学習している間は、教室の外で待ってもらっていたのだが、後期は、支援をする学生の配置を調整し、母親二人に対する日本語支援を行うことにした。母親二人は、日本居住歴が 10 年前後と長期であるが、普段は母語の中国語コミュニティの中で生活しており、日本語を話す必要がほとんどない。母親一人は、これまで日本語学習経験が全くなく、生活の中で必要最低限の日本語を身につけ、子どもの担任との面談の際は、携帯電話の翻訳アプリを駆使したり、子どもに通訳をしてもらったりして、対応しているようである。

まず、母親二人の日本語力を測るため、筑波大学日本語テスト集 TTBJ を受験してもらった。母親二人にどのようなことが日本語で言えるようになりたいか聞いたところ、病院に行ったときにお医者さんに病気の症状が説明できるようになりたいということだった。そこで、留学生が自らの経験に基づき、スライドを作り、「頭が痛い」「鼻水が出る」といった症状や「ズキズキする」「キリキリする」といったオノマトペが言えるように練習をした。それから、『いろどり 生活の日本語 初級Ⅰ』（国際交流基金）の第 15 課「熱があってのどが痛いんです」と第 16 課「食べすぎないようにしています」を使って、病気に関連する語彙や表現が的確に使えるように練習をした。途中、年賀状を実際に書く活動を取り入れた。母親二人に次に学習したいことを聞くと、買い物に行ったときに使える表現を知りたいということだったので、「『生活者としての外国人』のための日本語学習サイト つながるひろがる にほんごでのくらし」の「目指そう A1 レベル」の「シーン 4 ほしいものを選んで買ってみよう」の 3「すみません、これ、しちゃくしたいんですけど・・・」「シーン 5 お店の人に希望を伝えてみよう」の 1「じゃあ、しろもみせてください」、2「もうすこしおおきいのはありますか」、3「ちょっと、サイズがあわなくて・・・」

の動画を見ながら、語彙や表現を確認し、テキストを見なくても言えるようにロールプレイを繰り返した。

これまで全く日本語の勉強をしてこなかった母親一人は、最初は、大学生や留学生が話す日本語が理解できず、恥ずかしさからかテキストやノートを閉じてしまうことがあり、支援側がどのように対応すれば良いか戸惑うこともあったが、日本語支援を積み重ねていく中で、信頼関係ができていったように感じる。来年度は、日本語学習を継続しないのではないかと思っていたが、支援最終日に、来年度の開始日を聞かれ、日本語支援を心待ちにしてくれていることがわかり、非常に嬉しかった。母親二人とも一度も支援を休むことなく、参加したので、支援する場所が自宅に近く、時間が合えば、日本語を学習したいというニーズがあることがわかった。

来年度も地域のニーズに応じたコースを展開し、地域の課題解決の一助としたい。

3. 2025 年度に日本語支援をした学習者

①上級コース（前期・後期）	支援日：毎週水曜日 17:00-18:00
支援対象：茨城キリスト教学園高校 3 年生 1 名（帰国子女）	
支援内容：進学のための小論文指導、メールの書き方、漢字、外来語のカタカナ表記	
担当学生：【前期】大学 4 年生 1 名、3 年生 4 名で交代制	
【後期】大学 4 年生 1 名、3 年生 1 名	
②中級コース（前期・後期）	支援日：毎週水曜日 16:00-17:00
支援対象：近隣小学校の 1 年生 1 名、2 年生 1 名（中国）	
支援内容：国語、算数、生活語彙、カタカナ、漢字、日本語ゲーム	
担当学生：【前期】大学 4 年生 2 名、3 年生 1 名	
【後期】大学 4 年生 2 名、留学生 1 名	
③初級コース（後期のみ）	支援日：毎週水曜日 16:00-17:00
支援対象：近隣小学校の子どもの母親 2 名（中国）	
支援内容：病院や買い物で使う表現	
担当学生：大学 4 年生 1 名、留学生 2 名	
④初中級コース（前期・後期）	支援日：週に 2 回（1 回 90 分）
支援対象：茨城キリスト教学園高校に来た留学生	
【前期】3 名（ドイツ 2 名、ハンガリー1 名）	
【後期】2 名（ドイツ 1 名、イタリア 1 名）	
支援内容：初級文型、中級の文法、漢字、高校の教科支援	
担当学生：【前期】大学 4 年生 2 名、留学生 6 名（各学生は週に 1 回担当）	
【後期】大学 4 年生 1 名、留学生 3 名（各学生は週に 1 回担当）	
⑤オンライン日本語支援（後期のみ）	支援日：週に 2 回（1 回 50 分）
茨城県教育委員会が筑波大学に委託した事業に本学学生も参加	
支援対象：茨城県内各地の中学生（オンラインでつなぐ）	
支援内容：日本語と教科（理科、社会）の統合学習	
担当学生：大学 4 年生 4 名（各学生は、2 週に 1 回の割合で担当）	

4. 履修生の最終レポート紹介

最後に、2025 年度の履修生 3 名の最終レポートを紹介する。

4-1. 交換留学生：初級コースの母親対象の日本語支援を担当

今学期の外国人教育支援演習の実習を通して、外国人教育支援とは、日本語を教えることだけではなく、学習者一人ひとりの気持ちや背景を理解しようとする姿勢が大切であると学んだ。特に、中国人のお母さんたちを対象とした日本語学習支援に関わる中で、自分自身も多くのことを学ぶことができた。実習に参加する前は、「できるだけ分かりやすく説明すること」を自分の目標として意識していた。しかし、実際の支援の場では、正しく説明しても、学習者が緊張していたり、不安を感じていたりすると、うまく伝わらないことがあると感じた。そのため、回数を重ねる中で、説明の内容だけでなく、学習者が安心して参加できているかどうかを意識するようになった。中国人のお母さんたちの中には、間違えることを気にして発言をためらう方もおり、その様子を見て、急がずに待つことや、間違えても大丈夫だという雰囲気を作ることの大切さを実感した。この経験を通して、私の中での目標は、「うまく教えること」から「相手の立場に立って支援すること」へと変化していった。一方で、相手の理解度に応じてすぐに言い換えをしたり、状況に合わせて柔軟に対応したりすることは、まだ十分にできなかったと感じている。これは今後の課題であり、経験を積むことで改善していきたい点である。（中略）

今回の実習は留学生の私にとって日本の大学で初めて経験する形の教育支援でもあった。韓国の大学では座学中心の授業が多く、実際に地域の外国人と付き合いながら学ぶ機会はあまりなかった。そのため、実習を通じて、日本の大学では実践を重視した学びが行われていることを強く感じた。特に、支援を受ける側だけでなく、支援をする側であっても「外国人」という立場は、今回の活動において大きな意味を持っていたと思う。私自身も日本語を第 2 言語として学んできた経験があるため、学習者の不安と戸惑いに共感できる場面が多かった。この点は日本人学生とは異なる留学生だけの視点であり、支援に活用できた部分だと感じている。この経験を通じて留学生として学ぶことは単に専門知識を身につけるだけでなく、自分の背景や経験を学びの中で活用できるということを悟った。今後も、留学生としての視点を大切にしたい。

4-2. 大学 4 年生：中級コースの小学生対象の日本語支援を担当

今学期は特に生活語彙や、日本人が何気なく使う日本語・オノマトペ等を取り上げ、彼らの日常生活での困難を軽減することを目標に取り組み始めました。具体的に、レストランで注文という場面を設定し、頼みたいという欲求を自分で叶えることができるよう注文票にカタカナで書くという組み立てにしました。支援者側にとっては、目的意識の設定と目的達成のための教材準備（イラストのみ書かれたメニュー表の空欄箇所にカタカナで記入する）においては十分なものであると思い実施しました。しかし、実際に行ってもらうと、「なんで注文するの？」「実際には食べられないんでしょ？」という疑問が投げかけられました。そこで、私が立てた目的意識は傍から見たら合理的であるが、彼らの気持ちには即していないことに気づきました。これは以前、国語科指導法の講義を行う先生も言っていたことで、我々視点で立てた意義というものを子どもたちも同じように感じるかは難しいという課題そのものでした。そこで、咄嗟に私は「先生が〇〇食べたいから注文して欲しい」とお願いし、急遽彼らの目的意識を変更するようにしました。すると親切な彼らは「先生のためなら」と書き出してくれるようになりました。そこから、彼ら自ら（彼ら視点で考える目的意識の設定）が取り組みたくなる工夫を交えた教材づくりを心がけま

した。可愛い・面白い・日常を連想しやすい・馴染みがあるイラスト等の視覚情報を十分に活用し、選択肢を設けたゲーム形式で学ぶことができるようにすること、スムーズに日本語支援に入れるように彼らの特性を生かした計算対決を指導はじめに設定することを大事にしました。こちらの一方的な価値観の押し付けから、彼らの理解と意欲促進のための授業構成に変えることで、支援がより良いものになったのではないかと思います。またこれに加え今学期は、日本の文化を学ぶこともでき、年賀はがきや書き初めといった体験活動はとても充実したものでした。

写真 1:母親二人への支援の様子

写真 2：書き初めの様子

4-3 大学 3 年生：茨城県内各地の中学生対象のオンライン日本語支援を担当

今学期の本授業の活動として、私は、外国にルーツのある中学生へオンラインでの日本語学習支援に取り組んだ。支援の対象となる生徒は中学校の授業を抜けて時間を作り活動に参加するため、限られた時間を有意義な日本語学習の時間とすることを目標とし、学習支援活動に取り組んできた。この経験を以下にまとめていく。

まず、学習者が日本語を楽しく学ぶことができる環境づくりの重要性に気づいたことは、この活動を通して得た大きな学びである。カリキュラムに組まれた理科や社会科の学習支援では、画面越しに生徒のモチベーションを維持させることが難しいと感じたことがあった。そこで、次回の活動では授業内での生徒の発言、生徒の意向を汲み取ってスライドを完成させるなど、工夫をした教材づくり、授業中の自分と生徒の発話量の調整など自身の授業構成の見直しを行い、改善するという実践を通して成長を実感することができた。また、音声と映像に頼った日本語学習であり、対面での活動ではあまり意識して注目することのなかった学習者の小さな反応や、表情を見逃さないようにする意識を育てることができた。

一方で課題、改善点としては、オンラインを使った活動自体が初めての経験であり、難しさを感じることも多々あった。たとえば、お互いに反応する際に遅延が起きることや、書きの支援についてはほぼ付き添いの先生頼りの形となるなどが挙げられ、これらは今後、場数を踏んで改善する方法を自分なりに見つけていきたいと感じた。加えて、支援者が説明、発言するよりも、学習者が日本語を使う時間をより意識的に確保するということが課題として挙げられる。活動を続けていく中で、授業内での問いかけを増やしたり、学習者の反応を待つ時間を意識的に作ったりすることで学習者が積極的に参加する雰囲気を作ることが重要だと実感した。学習者が日本語を正しく使えるかどうかだけではなく、日本語を使いたいと思えるか、学習が楽しいと思えるかという視点を大切にするという学びを今後のオンラインでの活動のみでなく、対面での日本語学習支援にも生かしていきたいと考えている。

創作の楽しみ、観る楽しみ―「情報デザイン演習」

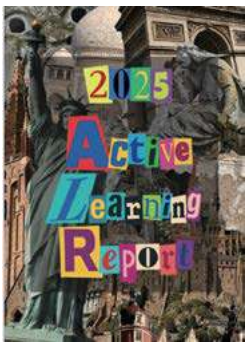
鈴木晋介

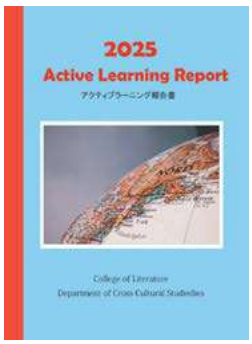
さまざまな広報のデザインを実践的に学ぶ「情報デザイン演習」。学生たちの受講意欲は高く、今年度は初めて２クラスの開講となった。今後も多くの学生に創作の楽しさを知ってもらいたいと思う。

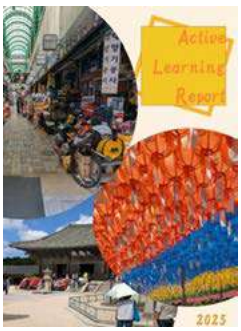
今年度も演習の基本パターン（新しい技術の教授→技術を活かした課題作品→講評会）を踏襲し、４つの課題作品制作を行った。第１課題「フリーアート（お題：春、秋)」、第２課題「地元の広報チラシ」、第３課題「見開き雑誌記事」、第４課題「アクティブ・ラーニング報告書の表紙」である。第１課題の時点では全員が使用ソフト（Adobe InDesign）にふれるのが初めてという状態。これが第３課題あたりまでくると自由自在に使いこなすようになってくる。第４課題は本冊子の表紙づくりで、今ご覧の冊子の表紙を飾っているのは今年も情報デザイン演習受講者の最優秀作品である。他のソフトも併用しながら学生が手作りで描画、レイアウトした力作であった。学生ひとりひとりのプレゼンを聞きながら作品を鑑賞する楽しみもまたこの演習ならではのものである。

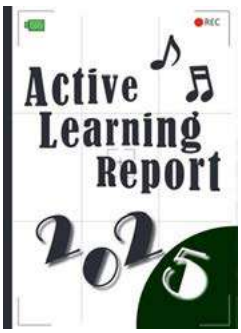
ここでは最優秀賞には惜しくも届かなかった力作たちを紹介したい。

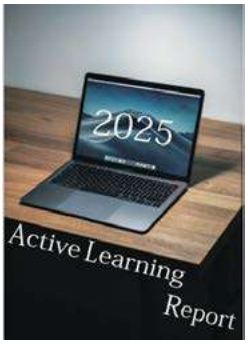
＜２０２５年度　学生作品「アクティブ・ラーニング報告書の表紙」＞





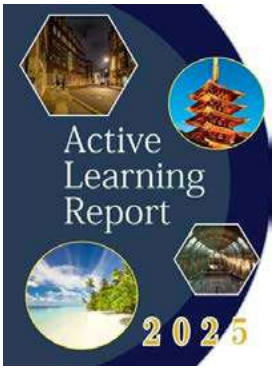






アクティブ・ラーニング報告書
ACTIVE
LEARNING
REPORT
2025

ACTIVE
LEARNING
REPORT
2025
茨城キリスト教大学
文学部文化交流学科


Active
Learning
Report
2025

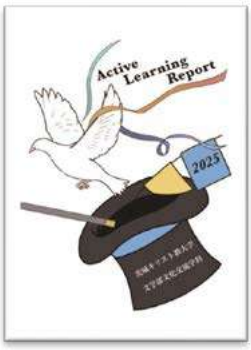
文学部
茨城キリスト教大学

2025
Active
Learning
Report
茨城キリスト教大学 文学部文化交流学科

ACTIVE
LEARMIMG
PEPORT
2025

Active
Learning
Reports
Ibaraki Christian University

2025年度
アクティブ・ラーニング報告書


Active
Learning
Report
2025

文学部　文化交流学科
A L R
Active Learning Report
2025 年度
アクティブラーニング報告書

ACTIVE
LEARNING
REPORT
2025
茨城キリスト教大学文学部文化交流学科

茨城キリスト教大学
Active
20 Learning 25
Report
文学部
文化交流学科

韓国語チャットアワー報告

鄭 敬珍・入山 美保

今年度初めて、文化交流学科で、韓国語チャットアワーを行うことになりました。これまで、現代英語学科では、インターン生による英語チャットアワーが行われていましたが、文化交流学科では、授業以外で、正規学生と留学生が交流する機会がほとんどなく、場の創出が課題としてありました。そのような折、2025年4月から1年間、協定校の韓国の新羅大学校から交換留学生として本学で学んでいるハ・ソンヒさんから、正規学生と交流する場を持って、日本人の友人をつくりたいという希望を聞き、教員2名も協力して、韓国語チャットアワーを開くことにしました。授業の時間帯と重複して来られないという学生がいないように、2025年12月4日（木）、11日（木）、2026年1月8日（木）の昼休みの時間帯（11:50-12:30）に行いました。

【交流の様子】

1回目（2025年12月4日）

参加したのは文化交流学科と現代英語学科の学生の9名でした。参加者全員がお互いの顔を見ながら話せるように、文化交流学科共同研究室で行いました。韓国語が話せる学生も、そうでない学生もいましたが、「韓国に興味を持っている」、「韓国人と話してみたい」という韓国好きの学生や夏の文化交流体験で韓国に行った学生が集まってくれました。初対面の学生が多く、最初は緊張した面持ちでしたが、韓国語と日本語で名前を書いた名札を作って自己紹介をしたり、持参したお弁当や韓国のお菓子を食べたりしながら、ゆったりとした雰囲気の中で進めていく中で、自然と打ち解けていきました。

チャットアワーでは韓国で広く知られている会話型の心理ゲームである「ソン・ビョンホ・ゲーム」をやりました。 やり方は、参加者全員がすべての指を立てた状態からスタートします。

進行役がある条件（お題）を提示し、その条件に当てはまる人だけが指を1本折ります。それを繰り返し、最初に指をすべて折った人が負けもしくは勝ちとなります。

（写真中央がソンヒさん）

2回目（2025年12月11日）

2回目は申込段階で参加者が以前より増えるのがわかり、11207教室で実施することにしまし

た。16名の参加者の中には、実習後に駆けつけた食物健康科学科の学生もいました。1回目に引き続き参加してくれた学生と今回がはじめてという学生もいました。韓国の若者がよく使う略語クイズやゲーム、好きな推しの話など、終始、楽しい交流の時間となりました。

写真は、韓国の若者がよく使う略語クイズの様子です。「‘ピョンド’とは？漢字音だと片道の意味になりますが、実は、コンビニ（ピョンイジョン）弁当（ドシラク）の略語になります」と説明しています。

他に二者択一のどちらか一方を選んで理由を述べ合う「バランスゲーム　どっちが好き？」も行いました。

3回目（2026年1月8日）

当初は、昨年の2回で終わる予定でしたが、2回目を実施した際、文学部以外の学生もチャットアワーへの参加を希望していることがわかり、3回目のチャットアワーを行うことにしました。年明けということもあってか、学生の参加は5名でしたが、人数が少ない分、より深い話ができ、留学生との交流をさらに深めることができました。参加者同士、距離も縮まり、韓国にまつわるさまざまなテーマでフリートークが繰り広げられました。後日、参加者同士で韓国料理を食べに行くなど、チャットアワーを機に、交流が継続されるという大変嬉しい出来事もありました。

今回の韓国語チャットアワーは初めての試みで、参加者はどのくらいいるのか、どのような内容が良いのかという手探りの状態から始めましたが、ソンヒさんが参加者が楽しめるように時間をかけて、内容を考え、スライドを作ってくれたおかげで大成功に終わりました。普段の授業では、日本語で話すソンヒさんと韓国語で話すことにより、「聞いたことは理解できるが、言いたいことが上手く表現できない」ということを体験し、韓国語学習へのモチベーションにつながった参加者もいたようです。

本学には、例年、韓国の他、イタリア、ウクライナ、キルギス、台湾、中国、ベトナムから留学生が来ています。今後は、チャットアワーを契機に、留学生と正規学生の交流が深まるように、留学生の母語であるさまざまな言語で行いたいと思っています。正規学生が中心となって、留学生と一緒に企画や運営を行えるようにするのが目標です。

2025 年度　文化交流学科講演会（前期）の報告

勝山　紘子

7 月 3 日に、11 号館 11203 教室で 2025 年度前期学科講演会を開催した。今回は、ひたちなか市でご活躍のプレイアーティスト、バージル・マサヨさんが「アフリカ世界とわたしとあなた　2025」というタイトルで講演をしてくださった。文化交流学科 1 年生の基礎ゼミ（木曜 2 限）に合わせた日程であったが、他学科や他学年からの参加者もみられ、アフリカ文化への関心の高さが窺えた。教員と学生を合わせて約 100 名が出席した。

バージルさんはタンザニアで長年、アーティスト・教育者として活躍されてきた。講演では、タンザニアの自然や人々の暮らしに始まり、子供たちの教育の問題、映画出演のお話やスワヒリ語での絵本製作の思いなど、さまざまな角度から実際の体験を踏まえたアフリカの現状を話してくださった。普段聞く機会のないアフリカでのエピソードに、学生も教員も興味津々で聴き入った。

1 年ゼミの学生は講演後、感想をレポートにまとめた。以下にレポートからのコメントを抜粋する。

【1 年生のコメント】

・特に印象に残っているところは、マサヨさんが作った音楽付きの絵本についてです。体で数字を表している様子が描かれているカラフルな本は、ただの絵本ではなく教科書や鉛筆が当たり前にあるわけではないタンザニアの子供たちのことが考えつくされているやさしい絵本だと感じました。日本では当たり前に教科書や鉛筆、消しゴムがあり、何不自由ない生活を送ることができていますが、自分の当たり前がみんなの当たり前とは限らないという事は頭に刻んでおこうと思いました。私もいつか、同じ言葉「ことば」を話す仲間を見つけられたらいいなと思いました。

・アフリカでは教育費がないため学校に行けず児童労働していたり、親が教育の重要性や必要性の理解が薄かったりすること。そもそも学校側の教員不足や机、椅子、教科書が不足していたりと様々な問題によって教育を受ける子供が少ないという問題。しかし、この問題をどこの家庭にもあるテレビを使って教育番組という形で解決しようとするとおっしゃったとき、私はとても感心した。歌と体で数字を覚えさせるというのも知識をつけるだけでなく身体の運動にもなっていてとても良いと思った。

・バージル氏の「同じ空間で同じ環境を共有する仲間を探しなさい。」という言葉を聞いて、現代社会にとってすごく大切なことだと気付いた。身分や生まれ育った環境が違っていても同じ時間を過ごすことで、感情を分かち合いお互いを思いやる気持ちが生まれ、そこには争いは起きないのではないかと考えた。同じ人種同士で傷つけあったり、違う人種だからと言って傷つけたりすることは、世界の戦争だけではなく身の回りで起きてしまっていることがあると考える。ＳＮＳなどでも対立や衝突が日々行われているが、実際に空間を共有することの大切さに気付くことができれば人々の意識も変わっていくと考える。今回の講演を聞いて、偏見や先入観で人を判断せずその人は物事についてどのように考えるのかを共有し自分の考えを深められる人になりたいと考えた。

【バージル・マサヨさんのプロフィール】

～プロフィール～

Barzile Masayo
バージル　マサヨ

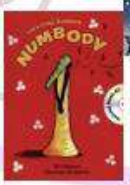
Educator(エデュケーター)
Play Artist (プレイアーティスト)

茨城県ひたちなか市育ち
日・英・スワヒリ語のトリリンガル

人生の1/4は海外に暮らし、現在は日本を拠点に活動。
特に東アフリカタンザニアには2005年より行き来し
トータル8年ほど滞在。
現地では伝統画法ティンガティンガ画法の弟子入りに
始まり、絵本出版、芸術大学の学生、孤児院ボランティア、
子どもTV教育番組制作、国際音楽祭出演、現地のコメディ
映画への出演など多岐に渡り活躍。

子ども英語講師・モンテッソーリ教師・リトミック講師
スワヒリ語翻訳＆通訳
アフリカ文化の講演・ワークショップ等も開催

2018年にアフリカから日本へ拠点を移した際、犬の散歩中に地
元の海岸のプラスチックゴミの多さに衝撃を受けゴミ拾い活動
をスタート→任意団体Love Earth Dayを主催
★2024年　茨城県代表として脱炭素チャレンジカップ出場
　→優秀賞・オーディエンス賞のダブル受賞
★2023年4月20日　世界のアースデイに合わせたイベント
　Earth Day UBA! Hitachinakaを開催

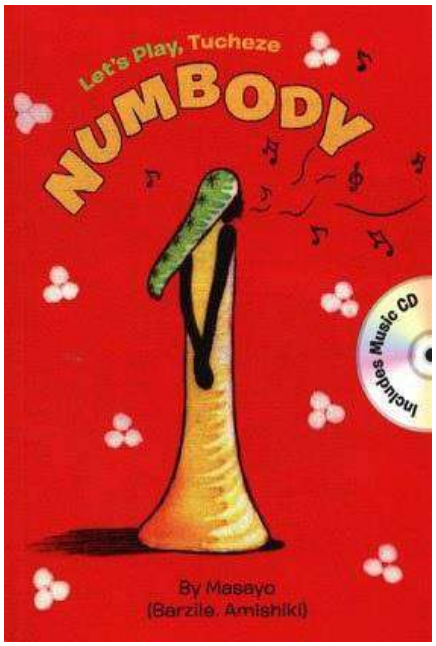


音楽アルバム：LINDA(2005), Marching Time(2007)
絵本：Let's Play NUMBODY(2011アメリカにて受賞)
TV出演：グッと地球便(2015讀賣テレビ)
　　沈まぬ太陽(2015WOWOW)

「地球と未来(子ども)と仕事する」ことを
モットーに、夢を持って人生を豊かに生きる
ことを日々実践中。

ひたちなか市総合企画審議会委員
ひたちなか市那珂湊第二小学校学校学校運営協議会委員
ひたちなか市国際交流協会理事

【バージルさんのパワフル＆ピースフルな講演】
クイズや写真が盛りだくさんで、楽器演奏もあり、目にも耳にも楽しい講演だった。学生からも興味深い質問がいくつも出た。



【タンザニアの楽器や衣装、写真の数々】
教室の前には現地の写真やバージルさんの絵画作品、楽器、バオバブの実などが展示された。学生たちは実際に手に取って、手触りを感じたり音を出したりして楽しんだ。

【バージルさん制作の絵本】
学習環境の整っていないタンザニアの子どもたちのために、勉強道具がなくても数が覚えられるようにと作られた絵本『Let's Play NUMBODY!!』。体をつかって数字の形と数の概念を理解する工夫が施されている。2012 Children's Africana Book Award Notable Book 賞を受賞。

文化交流学科後期講演会

岩間信之

1.　多文化協働の重要性

2025 年 11 月 6 日（木）に、横田能洋氏をお招きして「外国にルーツのある子どもたちの支援現場から」というタイトルでご講演いただいた。横田氏は茨城 NPO センター・コモンズの代表であり、常総市にある認可外保育園「はじめのいっぽ保育園」の園長を務めている。茨城 NPO センター・コモンズは県内最大級の認定 NPO 法人であり、多文化共生推進事業をはじめ、幅広い活動を展開している。なかでも、外国にルーツのある子どもたちの支援は、先駆的な取り組みとして全国的に評価されている。

外国人労働者が多い茨城県では、多文化協働（多様な背景を持つ人々が互いに尊重し合い、地域社会の一員として共に生き、働くこと）の推進が、喫緊の課題となっている。多文化協働は、文化交流学科における学びの柱の一つである。また、茨城キリスト教大学では、外国にルーツのある子どもたちの包括的支援を目指した IC with U プロジェクトを、2021 年から実施している[1)]。同プロジェクトには、多くの学生や教職員が参加している。今回の講演会は、こうした学生・教職員にとって、大きな学びの機会となった。

[1)] https://www.icc.ac.jp/edu/news/2021/detail/ksbmhp0000008dn1-att/IC_with_U.pdf

2.　講演の概要

1）NPO で働くという選択肢

講演は、横田氏の自己紹介から始まった。大学で社会学を学んだ横田氏は、自身の活動や授業を通して、視覚や聴覚に障害のある人々と関わる機会を得たという。また、アメリカで開催された世界ろう者大会に参加したことで、日本はアメリカと比べて障がい者運動が十分に成熟していないことを痛感したと語った。同氏は大学卒業後に一般企業に就職したものの、仲間たちと障がい者支援について学び続けた。日本では、1995 年の阪神・淡路大震災が契機となり、1998 年に

写真 1.　横田能洋氏

特定非営利活動促進法（NPO 法）が施行された。これを機に、横田氏は仲間たちと茨城 NPO センター・コモンズを設立し、一般企業を辞めてコモンズに転職した。

NPO とは、民間の立場で自発的に社会課題解決に取り組む、特定非営利活動法人である。行政等の制約を受けずに社会貢献に専念できる点が、NPO で働く魅力であるという。NPO はボランティア組織ではないため、収益事業を行うことが認められている。職員には給与も支払われる。NPO を立ち上げる／NPO で働くという選択肢は、これから進路を考える学生たちにとって、新鮮なものとして受け止められたと思われる。

2）茨城 NPO センター・コモンズの取り組み

茨城 NPO センター・コモンズは、14 名の常勤職員を擁し、水戸市と常総市の事業所有する、県内屈指の NPO 法人である。引きこもりがちな市民や子ども、外国人（外国にルーツのある子どもを含む）、自然災害の被災者、高齢者などを幅広く支援しているほか、こうした社会的弱者を支える各種 NPO 法人をサポートする業務も担っている。

横田氏は、外国にルーツのある子どもたちへの支援に力を入れている。日本社会になじめずにいる未就学児の保護者や、日本語が十分に話せず学校で孤立している子どもたちは、深刻な状況に置かれている。こうした子どもたちを支援するために、コモンズでは、外国人住民が多い常総市において、「はじめのいっぽ保育園」や、外国人住民と地域住民の交流拠点「えんがわハウス」、DV や育児放棄などの問題を抱える外国人住民を緊急保護する「えんがわハイツ」など、計 8 つの施設を運営している。これらの施設は、空き家を購入し、自分たちで DIY で改修した建物である。

写真 2.　常総市の施設
（講演資料より抜粋）

「はじめのいっぽ保育園」には、正規の保育士に加え、常総市で生まれ育ち、日本で子育てを経験した外国人スタッフが複数働いている。こうしたスタッフは、子育てに悩む若い保護者、特に母親にとって心強い相談相手である。この保育園は、外国籍の母親たちの交流拠点でもある。また、保育園の 2 階では、学校の勉強についていけない小学生以上の子どもたちを支援する放課後教室も開かれている。高校進学を希望する子どもたちへの進学・就学サポートも、コモンズの重要な取り組みの一つである。さらに、県内各地の学校へ通訳や日本語教師を派遣する活動も行っている。

3）多文化ソーシャルワーカーの勧め

多文化協働社会を築くには、地域住民の協力が欠かせない。コモンズでは地域住民と外国人住民の橋渡しをする多文化ソーシャルワーカーの育成を進めている。ぜひ大学生の皆さんにも、多文化ソーシャルワーカー育成講座で学んで頂きたいとのことであった。

3.　学生たちの感想（一部を抜粋・校正。カッコ内は学生たちのイニシャル）。

写真 3.　講演会場の様子

これまでの講義や講演会では、日本語教育や現在の政治情勢の視点から、多文化協働についての話を聴いてきた。今回の講演はそれらとは異なり、より人間味のある内容であったと感じた。それは決してきれいごとだけで解決できるものではない。私たちは、正規の手続きで日本に来た人々に対して、最低限の権利を守らなければならない。例えば、親の転勤で日本に来た子どもたちから、日本語が分からないという理由だけで学ぶ権利を奪うべきではないし、将来の選択肢を制限すべきでもない。文化交流や異文化共生における新たな課題が見えたように思う（I.T）。

横田さんの話の中で、「支援から共生へ」という言葉が心に残った。水害後の常総市で空き家を改修し、外国籍住民も一緒にまちづくりに参加している姿は、まさに共生社会の具体的な形であると感じた。今回の講話を通して、知識の不足が偏見や差別につながることを実感した。これからは、外国籍の人々の現状を理解し、自分にできる関わり方を考えていきたい（I.M）。

教育は将来の可能性を広げる大切な機会であり、お金の有無によって夢をあきらめてしまう現実は深刻だと感じた。日本社会が多様な背景を持つ人々と共に生きていくためには、学ぶ機会や夢を持つ権利を、すべての子どもに保障する必要がある。行政の支援だけでなく、地域や企業、個人が協力して環境を整えることが、真の多文化共生につながるのだと思った（O.K）。

自分の知らないところで苦しんでいる人がいること、そして子どもがその中にいるという事実は、非常に心苦しいものである。私は将来、子どもたちを助ける仕事がしたいと思っている。しかしその一方で、向き合いたくない、怖い、もっと楽しく好きなことだけを見ていたい、という気持ちがあるのも正直なところである。その葛藤の中で、将来について今も思い悩んでいる。だからこそ、見たくないもの、見るべきものをきちんと見て行動している横田さんのような方は、本当に大切で、欠かせない存在だと感じた。とても素敵なお話と活動であり、このような場でお話を伺う機会をいただけたことに、心から感謝している（O.M）。

文化交流学科ファカルティ・ディベロップメント（FD）報告

文化交流学科主任　中山健一

日時：2026 年 1 月 6 日（火）14:30 ～ 16:00
場所：茨城キリスト教大学 11 号館　11307 教室
内容：基礎演習の内容改善に向けて（2）

本年度も昨年度に引き続き、外部講師を招かず学科教員のみで、学科 1・2 年生必修科目「基礎演習 I～IV」の内容改善に向けた報告と議論をおこなった。

まず、本学科のゼミ（基礎演習・文化論演習）の概要を表 1 に示す。

1 年次「基礎演習 I、II」
もっとも基本的なことがら。
各クラス共通のことがらを習得。クラスどうしの差異はあまりない。
2 年次「基礎演習 III、IV」
教員の専門分野など、各クラスの独自性がある一方で、
3 年次にどのゼミを選んでも対応できるような、あらゆる学問に共通する基礎的な知識・技能を、各クラス共通して習得する必要がある。
3 年次「文化論演習 I・II」、4 年次「文化論演習 III～IV」（3 年・4 年合同授業）
基礎演習 I～IV で習得したことがらを基盤としつつ、具体的な研究手法は、各分野に委ねられる。教員の専門分野など、各クラスの独自性。

表 1：本学科のゼミ（基礎演習・文化論演習）の概要

当日は、事前に提出された「基礎演習」各クラスの授業報告書をもとに各担当教員が授業の報告をした。その上で、内容改善にむけた議論をした。

1．1 年次「基礎演習 I・II」の内容の報告と改善へむけた議論

1 年次「基礎演習 I・II」は 2 年次以降の学びのための基礎的な知識・技能を培う重要な科目である。主要な知識・技能を表 2 にまとめる。

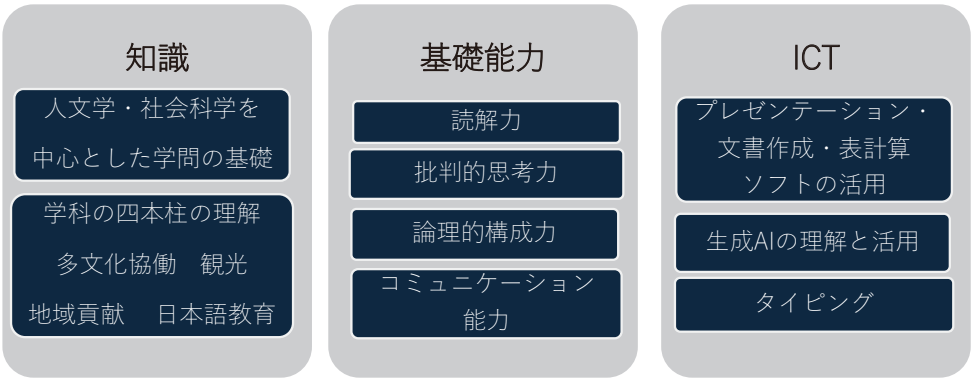


表 2：1 年次「基礎演習 I、II」で学科学生が身につけるべき知識・技能

しかしながら、時代の変化などにともない、従来の授業活動では対応しきれない部分も出てきた。具体的には、次の点である。

① 正規学生どうし、そして、お互いの価値観や言語・文化的背景が大きく違う正規学生と交換留学生が協働作業をおこなうのに必要なコミュニケーション能力が、従来の授業形態では十分に育成できていないのではないか。

② 生成 AI の普及により、あることがらについて調べ、内容をまとめる作業の効率は飛躍的に高まった。その一方で、自ら問いを設定して、その問いの答えをさぐろうとする力や批判的に思考する力は、これまで同様、あるいはこれまで以上に重要となっているにもかかわらず、十分に育成できていないのではないか。

これらの問題提起にたいして、今後の改善策が議論された。紙幅の都合上すべて挙げられないが、大きな点は次のとおりである。

＜おもに「①」について＞

1 つは、学生どうしが協働して課題解決に取り組むための基礎的技能を育成する「チームビルディング」の必修化である（これまでは任意参加）。

2 つめは、「新入生交流会」の内容改善である。「新入生交流会」とは、毎年 5 月におこなわれるイベントで、学科 1 年生と交換留学生全員が参加する。前期「基礎演習 I」の授業で準備をおこない、各クラスがいくつかのグループに分かれて、同じグループの交換留学生の出身国の言語や文化などを紹介する発表・パフォーマンスを考え、披露する。従来も、趣向を凝らしたものが披露されていたが、準備段階においてグループメンバーどうしでのコミュニケーション不全と、それにともない、一部の学生に負担が偏るなどの点が問題となっていた。また、聞き手の学生にとって、どれだけ異文化理解の促進が図れたか、明確でなかった。新たなアイディアとして、従来の発表型から変更し、各グループが同じグループの留学生の国の紹介ブースを作って運営し、学生たちがブースを運営しながら別のブースをまわって相互交流をする形が提案された。

＜おもに「②」について＞

後期「基礎演習 II」の授業で、学生に学科の学びにかかわる新書を読ませ、それをもとにレポート作成課題を課している。これまでは新書を学生自身に選ばせていた。新たなアイディアとして、表 2 で示した「学科の四本柱」ごとに共通の新書を読ませ、その上で、グループワーク･ディベートなどをふまえてレポートの問いを設定させる形が提案された。

2．2 年次「基礎演習 II・IV」の内容の報告と改善へむけた議論

今回は 1 年次「基礎演習 I・II」の内容検討に多くの時間を費やしたので、2 年次「基礎演習 III・IV」について十分議論を尽くすことができなかったが、文献講読、ディスカッションの方法、生成 AI の活用方法などについて議論された。

また、本学科の全学生が、どんな専門や将来のキャリアを選んだとしても共通して身につけるべき知識・技能とは何なのか、より明確にする必要性が昨年度の FD において提示された。これは容易に答えが出ない問いであり、十分に議論が尽くされたとは言えない。今後も同様の場を設け、議論を続ける予定である。

『アクティブ・ラーニング報告書』は茨城キリスト教大学文学部文化交流学科の出版物です。
Active Learning Report is published by Department of Cross- Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University.

2025 年度 文化交流学科

アクティブ・ラーニング報告書

2026 年 3 月 1 日発行

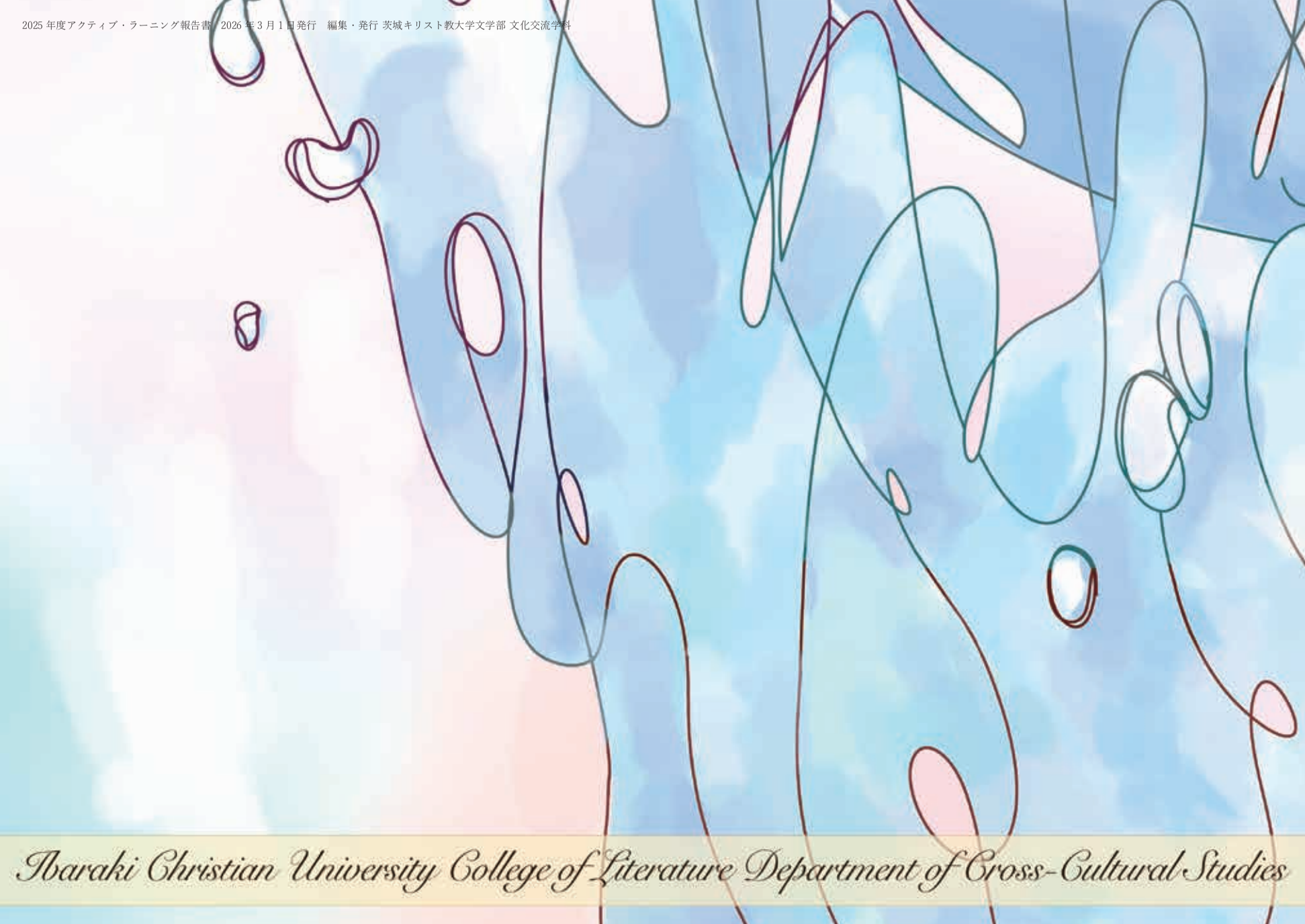
©2026, Department of Cross-Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University

発行　茨城キリスト教大学文学部文化交流学科
〒319-1295　茨城県日立市大みか町 6-11-1
電話　0294-52-3215　（代表）

印刷　日立高速印刷株式会社
〒316-0034 茨城県日立市東成沢町 3-4-8
電話　0294-35-3511

編集　入山 美保
表紙デザイン　宮村 瞳（文化交流学科２年）

2025 年度アクティブ・ラーニング報告書 / 2026 年 3 月 1 日発行　編集・発行 茨城キリスト教大学文学部 文化交流学科



Ibaraki Christian University College of Literature Department of Cross-Cultural Studies